

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 20 年度派遣報告書

—ボツワナ共和国・ボツワナ大学、シヨナ語、H20. 11. 1-H21. 1. 31—

平成 19 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程前期 2 回生
井戸 雄大

自身の研究テーマについて

南部アフリカに位置するジンバブウェでは、1980 年の独立以降、農地の約半分を所有していた少数の白人農家から土地を買い取り、その土地を退役軍人や土地を持たない貧困層に分配するという再入植計画を実行している。研修者が調査対象とするマシヨナランドセントラル州、シャンバ県北部のマガジ 1 村は、1980 年にこのような計画が実行され、設立された再入植村である。この村は地縁・親族関係などから構成されない雑多な人々が集まった村落であり、氏族関係などによって構成されている本来のアフリカ農村と大きく異なる性格を持ち合わせている。そこで研修者は、前回の調査で、彼らの社会関係が再入植以降どのように構築されていったのかということに注目し調査を行った。再入植を果たしたものの多くは、入植当時牛などの財産を持たないものが多く、労働力不足、食糧不足に陥っていたことが明らかになった。その問題を解決するために、近隣村の住民と通婚関係を結び、社会関係を構築し労働人口を確保し、食糧交換などを行うことによって、このような問題に対処してきたことが明らかになった。

次回の調査では、この語学研修で習得したシヨナ語の能力を生かし、農業のほかにハンティング・砂金採りなど、多様化していると思われる生業の調査を行う。そして再入植以降、人々の移動が絶え間なく続いていることが明らかになったので、その要因の調査も行おうと考えている。

研修言語の概要

今回のボツワナ共和国で開催された ITP 語学研修で取り上げたシヨナ語は、ジンバブウェ、モザンビーク、ボツワナ共和国でそれぞれ話されている言語である。シヨナ語には、ゼズール方言、コレコレ方言、マニーカ方言、カランガ方言と 4 つの方言が存在する。ボツワナ共和国で話されているシヨナ語は、カランガ方言である。しかし、今回は研修者の調査地であるジンバブウェで標準語として使われているゼズール方言を中心に学習した。

語学研修の内容について

本研修では 3 カ月間を 3 つの期間に分割し言語研修を行った。

第 1 の期間(11 月 1 日から 12 月 13 日)では、シヨナ語の文法構造を中心に学習していった。その内容は、挨拶、現在形、現在進行形、未来形、過去形といった基本的なものである。休日には、シヨナ語のリスニングに慣れるために講師の友人であるシヨナ語話者と会い、会話を録音し、時には会話に参加するなどしてシヨナ語のリスニングに徐々に慣れていく訓練を行った。

第2の期間(12月13日から1月10日)のクリスマス休暇中は、授業が休講となったので、講師に紹介してもらったショナ語話者の家庭にホームステイを行い、英語、ショナ語を交えながらショナ語会話のトレーニングを行った。

第3の期間(1月10日から29日)は、ボツワナ共和国に出稼ぎに来ているジンバブウェ人が多く居住するハボローネ市郊外に出向き、出稼ぎジンバブウェ人の簡単なライフスタイルの調査を行った。この調査をショナ語で行うとことで疑問形などの会話技術を磨いた。同時に積極的に多数のジンバブウェ人と関係を構築することによって、様々な方言になれる訓練も行った。一方講義では、ホームステイ滞在中に必要であると感じた、比較構文、多様に存在する接頭語の使い方、一つの単語が他の単語にも影響をあたえるという協和音の技術(Concordance Agreement)の講義を受けた。



図1. ボツワナ大学言語学部における個人授業風景

研修期間中印象に残った体験や経験

現在、ジンバブウェ共和国は2000年以降多くの土地を所有していた白人農家から強制的に土地を没収するという政策を行い、また大統領選挙において対立政党の支持者の人権を抑圧した等の理由から、欧米諸国から経済制裁を受けている。このような背景から、多くの地域では物資が不足し、また通貨も年率2億%というインフレーションを経験している。このような経済的混乱により、多くのジンバブウェ人がボツワナ共和国に出稼ぎに来ている。

聞き取り調査から、彼らは独自の送金・輸送システムも構築し、金、物資を自国に送っていることが明らかとなった。その方法は、バスの添乗員に手数料と送金するお金を渡し、彼らにお金・物資を中継地点・または目的地まで届けてもらうというものである。このような形で物資、外貨を送金することにより経済危機に対応するジンバブウェ人の姿を見ることができた。



図2. フランシスタウンにおける物資の検査



図3. フランシスタウンにおける国境の通過

目標の達成度や反省点

11月の1日から1月30日までの3カ月間の研修で多くの人と出会い、またその人たちの協力もあり、3カ月間無事に研修を終えることができた。目標として、文法構造の理解と、辞書さえあれば自分で文章を作ることができる程度のライティング技術、会話を人と楽しむことができる位の会話技術の習得を目標に研修に臨んだ。

上記のように設定した目標には、文法構造の理解を除き、到達できなかったと感じている。その理由は、講師以外のショナ語話者と信頼関係を結ぶのに時間を要したことがあげられる。さらに講師の使う英語、または一般のジンバブウェ人が使う英語に甘えてしまったことも、目標を達成できなかった原因としてあげられると考えている。

しかし、この語学研修で学んだショナ語の技術を次回に予定しているジンバブウェでの調査に生かし、人々と実りある信頼関係を結び、有意義な調査にしたいと考えている。